

2020年9月～2021年2月

- 9月 5日 新型コロナウイルス感染拡大防止のため休止していた「小池光短歌講座」が再開。これまで館長講座として開催していたが、今年度から「仙台文学館ゼミナール」のプログラムとして開講。
- 6日 佐伯一麦館長によるエッセイ講座が始まる。
- 10月 4日 特別展「安野モヨコ展 ANNORMAL」オープン(12月13日まで)。
- 18日 東北地方および仙台市国内姉妹都市の小・中学生による詩作品を対象とした「第61回晩翠わかば賞・晩翠おば賞」贈賞式を開催。例年、土井晩翠の命日(10月19日)に合わせ「荒城の月市民大合唱」などの記念行事を催してきたが、今年度は感染拡大予防の観点から贈賞式のみ実施。
- 11月 22日 佐伯館長による対談イベント「北根ダイアログ」第1回を開催。ゲストは前館長の歌人・小池光さん(本紙p.4～p.6参照)。
- 27日 常設展示室内に「おてんとさん」(大正時代に仙台で発行された童話雑誌、またそれを中心とした児童文化運動)の歴史をふりかえるパネルを掲示。
- 12月 15日 朝から雪。敷地内の雪かきを行う。今シーズンは雪が多く、これ以降何度も雪かきの機会が。
- 25日 正面玄関に仙台の伝統的な門松(仙台城でも飾られていた門松を再現したもの)を設置。(写真①)
- 1月 5日 常設展示室の特集コーナーを展示替え。詩人の石川善助を紹介。
- 10日 新春恒例の「100万人の年賀状展」オープン(1階エントランスにて、2月14日まで)。

仙台文学館 公式ツイッターの写真から



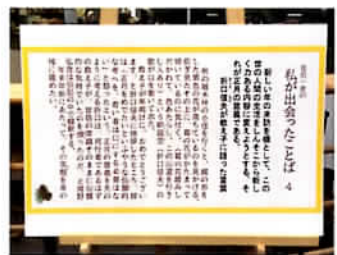
①正面玄関前に仙台の伝統的な門松がお目見え。



②トークイベント「佐野洋子を語る」。当館初のリモートイベントとなりました。



③パネル展「おてんとさんの100年」では、その長きにわたる会のあゆみを紹介。



館内エントランスでは、佐伯館長のエッセイ「私が出会ったことば」のパネルを隔月で更新しています。ご来館の際、ぜひご覧ください。

- 1月 16日 特別展「ふつうがえらい! エッセイスト 佐野洋子展」オープン(3月21日まで)。
- 19日 2階ギャラリースペースに、イラストレーターの安野光雅さん、作家の半藤一利さんの追悼コーナーを設置。
- 30日 特別展関連トークイベント「佐野洋子を語る」を開催。佐野さんのご子息でイラストレーターの広瀬弦さん、作家の江國香織さんが東京からリモート出演。聞き手は佐伯館長。(写真②)
- 2月 2日 おてんとさんの会100周年記念事業パネル展「おてんとさんの100年-仙台に咲いた子ども文化-」オープン(2階のギャラリースペースにて、2月23日まで)。(写真③)
- 26日 2階ギャラリースペースに「文学にみる震災資料展」コーナーを設置(4月4日まで)。



交通のごあんない

- バス利用の場合
 - 宮城交通バス
 - 仙台駅西口バスプール2～4番乗り場 仙台北・泉地区方面行 (急行・北山トンネル経由を除く)
 - 市営バス
 - 仙台駅西口バスプール4番乗り場 八乙女駅行
 - ※いずれも「北根二丁目・文学館前」下車
- 地下鉄利用の場合
 - 地下鉄南北線「台原駅」下車、南1番出口より徒歩約25分(台原森林公園内あかまつの道経由)
 - ※山道です。雨天時は道が滑りやすくなりますので、ご注意ください。
- 駐車場40台(無料)
 - 台数に限りがございます。なるべく公共交通機関をご利用ください。



カフェ ひざしのや
お食事、デザート、各種お飲み物などをご用意しています。
お得なランチメニューもあります♪
[営業時間]
10:00～16:00 (ラストオーダー15:50)
※ランチは10:00～14:00
TEL 022-219-1341

仙台文学館

ニュース

第四十号

Sendai Literature Museum News

エッセイ あかまつの道を抜けて

第2回——「サフランと松」

佐伯一麦

集合住宅の自宅の小さな庭でサフランを育てている。近所の方に球根を分けていただき、この三年ほどは、秋に薄紫色の花を付けると、赤い雌しべを摘んで料理のスパイス用に乾燥させて保存している。

森鷗外に「サフラン」という随筆があり、こんなことを書いている。(風と云ふものを揚げない、独楽と云ふものを廻さない。隣家の子供との間に何等の心的接触も成り立たない。そこでいよいよ本に読み耽つて、器に塵の附くやうに、いろいろの物の名が記憶に残る。そんな風で名を知つて物を知らぬ片羽になった)

近頃は、ゲームにばかり夢中で、外で独楽回しをしているような子供には滅多にお目にかかれない、とよく言われるが、文豪鷗外も今の多くの子供たちと同じような育ち方をしたのかもしれない。そんな鷗外が、名前と実物が結び付いている数少ない例として挙げているのがサフランである。大人になった鷗外は花屋の店先で、サフランの花が干からびた球根から咲き出ているのを見かけて、球根を二つ買い、鉢植えにして書斎に置く。花はすぐに枯れてしまうが、冬の時季にあつて、(水も

遣らずに置いたのに、活気に満ちた、青々とした葉が叢がつて出た。物の生ずる力は驚くべきものである)とその生命力に鷗外は目を瞠る。

冬でも青々としているといえば、「あかまつの道」で名前どおりに目にする、松もそう。それらの松を見上げるたびに思いつくのが、ドナルド・キーン氏が伝える三島由紀夫のエピソードである。

氏が三島の取材旅行に同行したときに、三島が松の木を指差し、居合わせた植木屋に「あれは何の木か」と尋ねたので、植木屋は「松です」と答え、松の木を知らないはずはないだろうと「雌松と呼んでいます」と付け加えた。それに対して、三島が真顔で「雌松ばかりで雄松がないのに、どうして子松ができるの」と聞いたので、植木屋もキーン氏も驚き呆れたという。松は雌雄同種で、雌松は赤松の、雄松は黒松の別称である。三島は松の名を知らなかったわけではなく、三島は松の名を知らなかったわけではないと思うが、都会育ちで、目の前の木とその名が合致しなかったのだろう。

(さえきかずみ 作家・仙台文学館館長)

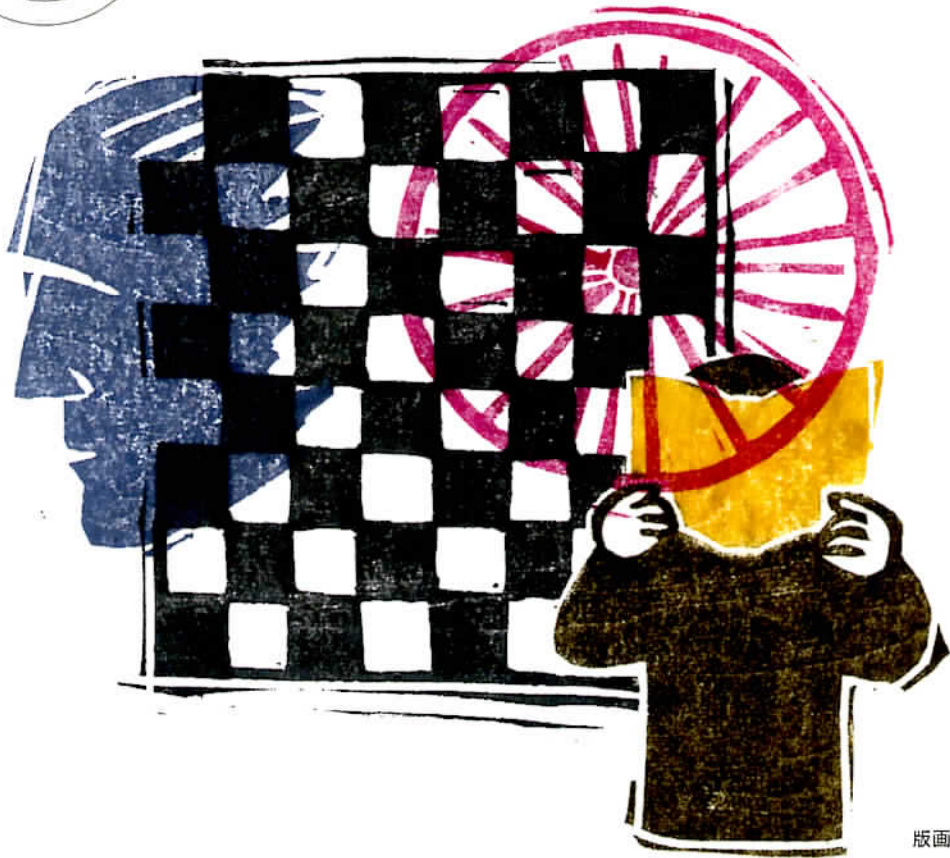


写真:佐々木隆二

CONTENTS

- エッセイ
「あかまつの道を抜けて」佐伯一麦 ……1
- シリーズ
「私の一冊」いとうせいこう ……2
- 特集
「佐伯一麦 北根ダイアログ 2020」抄録 ……4
- 予告
写真展「星野道夫 悠久の時を旅する」 ……7
- 文学館日誌 ……8





版画：明才

シリーズ「私の二冊」第34回 いとうせいこう

東野芳明 『マルセル・デュシャン』

私はちょっと面倒くさい物書きではないかと思う。

第一、「小説に関して一切の自分の現実を反映させてはならない」と決めていた時期が長くある。そうすると日常のエピソードが使えず、フィクションが確からしくなくなるわけだが、私はおかまいなしであった。

右の鉄則からは最近の十年ほどよくやく抜け出したが（とはいえ直接的な私小説にはなおもって距離感があり、ほとんど嫌味のように自分の体験談をわざとおかしな文脈に入れてみたりはする）、同じ手法を極力使わないというのも自分の決まりである。ゆえにマジックリアリズムが横行するかと思えば童話も書くし、古典芸能の知識をちりばめたフェミニズム系の中編もつい最近書いたばかりだ。

たことに間違いはない。

また東野芳明がべらんめえなタッチなのである。下町育ちの私にはそれがまたよかつた記憶がある。これが氣取つたデュシャン論であれば、私は鼻

同じ手法を使わない態度には、やはりそのように書き続けたイタロ・カルヴェイノへの傾倒が強く影響しているが、もう一人そこにマルセル・デュシャンという美術家という

か、反美術家というか、男というか、女というか、ともかくダダ界でもきわめて有名な、皆さんもご存じだろう人物がいて（そうそう、便器を出展してしまつた人ですね。ただしあれもただの便器ではない。いや便器としてはまつたくもつてただの物なのだが、その表面に「R.M.U.T.」などどこの誰だかわからない署名がある。むしろそこに美術における署名システムへの皮肉などがあると思うのだが、こつちはまず語られていない）、私はこのデュシャンなくして自分がないと感じるほどののだ。

ちなみに幾つかあるデュシャンの、人口に膾炙した言葉が「自分を繰り返さないこと」で、これは私にもし墓があつたら墓碑銘に刻みたいほどである。まあ墓はないし持つ気もないから、こ

の墓碑銘は永遠に存在しない。それはまた実にデュシャンっぽい現象で心地よいことだ。

そういうわけで、私は書く上においてもほぼ続編を作らないし（『国境なき医師団』を見に行く）シリーズだけは別。これには社会的責任があるので。というか「続編を作らない」という決まりを「繰り返さない」というひねくれた感覚も自分にはある）、それどころか舞台や映像内で演技をしてみたり、音楽に足場を置いたり、テレビ番組の司会をしてみたりするのも、ある意味ですべて「自分を繰り返さないこと」の領域にある行為である。そのおかげで「結局、いとうさんは何が本職なんですか？」という質問がいつまでも繰り返され、私本人としてはすっかり答えるのに辟易している始末だ。

私をデュシャン主義者（そのいささかマニアックな世界では「デュシャンピアン」という）にしたのは、他でもない大学一年くらいで読んだ東野芳明の『マルセル・デュシャン』という大著であつた。今でもデュシャン関係の書物は特別な棚にあるが、その中でも前に出されて置かれてある。この本を確か私は古本屋で見つけて買った。高円寺の「佐藤書店」のシールが貼つて

られたはずだ。

中にレーモン・ルーセル『アフリカの印象』の話も出てくる。最初は山口昌男の文化人類学に関係ある本だと思つてしたが、やはり不思議な縁で私はこの本にも古本屋で出会つた。野方駅の近くの店ではなかつたか。

そして、冒頭に書いた「小説に関して一切の自分の現実を反映させてはならない」というのはルーセルの創作における掟であつた。

のちに三十代の頃、私は東野芳明の『マルセル・デュシャン』を読んだ時に抱いた直感だけを頼りに「55ノーツ ソニール、デュシャン、レーモ

あるから間違いはない。

しかしなぜ買ったかはもう覚えていない。ちょうどデュシャン展があつたのをかもしれない。ともかく四百ページを超す本で、図版もたくさん入っているし、年譜から何かが揃つていて我ながらデュシャンに入門するにはこれしかないという内容である。けれども意外なほど安くサーピスしてくれていたのではないだろうか。私は貧乏学生で高い古本など手が出るはずもないからだ。

そしてむさぼるように読んだ。これだけは事実である。なぜならほとんど全ページではないかと思うほど折られているからだ。のちのちに世間に流布した付箋も貼つてあるから、時期を空けて何度も読み直し、何度も感銘を受け

ン・ルーセル」という論文に熱中してブログばかり書き、彼ら三人が沈黙の時期を持つと同じく小説が書けなくなつて失語症のような内的体験を長く続ける。

それでもなんの恨みもない。私はあの東野芳明の『マルセル・デュシャン』から生まれてきた子供だからであり、それがどのような現実を引き連れてこようが、すべて苦しくも喜ばしいこととして受け止めるのが当然だ、とも疑いなく考えている。それが若い頃の読書というものだろう。



東野芳明
『マルセル・デュシャン』
(1977年 美術出版社)

いとうせいこう



作家・クリエイター。1961年、東京都生まれ。1988年に『ノーライフ・キング』でデビュー。1999年『ボタニカル・ライフ』で第15回講談社エッセイ賞受賞、2013年『想像ラジオ』で第35回野間文芸新人賞受賞。近著に『夢七日夜を昼の國』『ガザ、西岸地区、アンマン』『国境なき医師団』を見に行く』『福島モノローグ』などがある。漫画家・みうらじゅんとは共作『見仏記』で新たな仏像の鑑賞を発信。音楽活動においては日本にヒップホップカルチャーを広く知らしめ、日本語ラップの先駆者の一人である。テレビ、映画にも俳優として出演するなど多岐にわたって活動。2021年3月に受賞作品が発表された第4回仙台短編文学賞では選考委員を務めた。

特集 1

佐伯一麦
「北根ダイアローグ2020」

「小池光に聴く」(抄録)

今年度当館の館長に就任した作家の佐伯一麦が、各分野で活躍されている方を迎えてお話を伺うシリーズ企画「北根ダイアローグ」。コロナ禍による延期をへて、十一月二十二日に第一回目を開催しました。前館長の歌人・小池光さんをゲストに迎え、リラクセスした雰囲気の中、短歌と小説のジャンルを越えた新旧館長対談となりました。その一部をお楽しみください。

写真・佐々木隆二



◇定着した短歌講座

佐伯 十三年間本当にお疲れさまでした。館長を十三年間なさった感想からお伺いしたいのですが。

小池 何もしてないんですよ(笑)。いただいたスタッフにお任せしてやってきたような感じで。私としてはトークセッションを何回か、あと月一回の短歌講座を始めて、それが今も続いています。今はコロナ禍で人数を制限して

いますが、ふだんは毎回八十人、九十人くらい来るんです。それだけの人が短歌を作り続けているということがすごく嬉しいことで、「定着」という感じがしますね。

佐伯 八十人、九十人が短歌を作ってきて集まるって、やっぱりすごいことですよ。
小池 そう。短歌を作って月一回ここに来るということが生活のリズムのひとつになっている人が何人も出てきた。本当に嬉しいですし、責任も感じます。

◇小池光の短歌

佐伯 小池さんの最初の歌集『バルサの翼』(一九七八年)のあとがきに、「短歌はなにもまず五句三十一音の(定型詩)として存在した。(伝統詩)としての短歌、という発想ほどなじめなかったものはない。」とあります。短歌って、『万葉集』や『古今和歌集』からずっと続く「伝統詩」ですよ。その一方で、五七五七七という「定型詩」の側面がある。僕が思うには、小池さんは最初、「現代詩としての定型詩を作るんだ」という思いがあったんじゃないかと。

小池 そうですね。詩は詩なんです。でも歌人は「詩」ってあまり言わない。で、五七五七七という定型は、考えてみれば理不尽な話で、全部その枠に収めなきゃいけない。枠の中に収めて、かつ詩を書くという二重の難しさが短歌にはある。それが面白さにもつながっていくわけなんですけれども。

佐伯 僕たちは、短歌というと『古今和歌集』や『万葉集』で「古典」という意識があるけれど、詠まれたときには当時の現代詩だったわけですよ。だから僕は、短歌を「現代詩だけ

定型を踏んでいるもの」と考えたい。そうすると、仙台文学館で八十人も九十人も現代詩を作っているのはすごいことだと思います。それが成り立つのは、やっぱり自由詩ではなく定型詩だからというのはあるんでしょうね。

小池 ありますね。「まったく自由にあなただの感じていることを書いてください」とって言われたって、実際にどうしていいかわからない。「何でもいから」というのは、制約がないように実はいばん大きな制約。子どもの宿題を学校の先生が出すとしても、「何でもいから自由に書いて」とって言われたって子どもは困る。「夏休みの思い出を書きなさい」とって言われたらまだ分かるというのと同じように、五七五七七って



佐伯一麦

小池光

ましてや歌がだんだん上手になつていくのを見ると、すごく感動してしまいます。

佐伯 なるほど。指導を受けると上手になつていくのですか、短歌は。

小池 「てにをは」を一つぐらい直して、ぱんつと歌が良くなるのが一番望ましい添削なんですけれども、そういう人ばかりとは限らなくて、全部手術しなくちゃいけないっていうのもあります。

佐伯 その人の人間性を変えちゃうみたいになると、ちょっと躊躇するっていう感じはありますよね。

小池 そう、躊躇する。だから作者の言いたいことはずらさないで、小さなところを直す。最初の頃は、これも言いたい、あれも言いたいっていういわゆる「材料詰め込みすぎ」の歌も多かった。大胆にスパツ、スパツと落としていくのが短歌の第一歩なんですけど、自分の愛着のある言葉が削られるとすごく傷つく。でも最近、省略のよく利いた良い歌がいっぱい出てくるようになりました。

やすい。

佐伯 『バルサの翼』の中に、「バルサの木ゆふべに抱きて帰らむに見知らぬ色の空におびゆる」という歌がありましたけれども、青年期特有の存在の不安のようなものが感じられます。

小池 最初の頃は、要するに、カッコいいものに憧れたんだよね。

佐伯 寺山修司とか、あのあたりの？

小池 そうそう。学校の国語の時間で習う斎藤茂吉とか島木赤彦の歌は、なんてくだらないんだって思ってた(笑)、全然興味がなくて。それが大学生の頃に、いわゆる前衛短歌っていうものに基づかつちゃった。学校で習ったものと同じ短歌なのに、こんなに違うものがあるのかというのがセンサーショナルな発見で、そこから短歌に近寄って行ったんです。だから最初の頃は、カッコいい歌に憧れてカッコいい歌を作っていた。それで三十歳を過ぎてかっこよさにも疲れてきて(笑)、だんだん私小説的になつていく。

佐伯 『魔駅』(一九八二年)や『日々』(一九八八年)になると、家族とか日常のディテールみたいなものを大事にするという作風が変わってきましたよね。それが最近の歌集『思川の岸辺』(二〇一五年)『梨の

特集1 佐伯一麦 「北根ダイアローグ2020」

「小池光に聴く」(抄録)

今年度当館の館長に就任した作家の佐伯一麦が、各分野で活躍されている方を迎えてお話を伺うシリーズ企画「北根ダイアローグ」。コロナ禍による延期をへて、十一月二十二日に第一回目を開催しました。前館長の歌人・小池光さんをゲストに迎え、リラックスした雰囲気の中、短歌と小説のジャンルを越えた新旧館長対談となりました。その一部をお楽しみください。

写真：佐々木隆二



◆定着した短歌講座

佐伯 十三年間本当にお疲れさまでした。館長を十三年間なされた感想からお伺いしたいのですが。

小池 何もしてないんですよ(笑)。いただいたスタッフにお任せしてやってきたような感じで。私としてはトークセッションを何回か、あと月一回の短歌講座を始めて、それが今も続いています。今はコロナ禍で人数を制限して

いますが、ふだんは毎回八十人、九十人くらい来るんです。それだけの人が短歌を作り続けているということがすごく嬉しいことで、「定着」という感じがしますね。

佐伯 八十人、九十人が短歌を作ってきて集まるって、やっぱりすごいことですよ。

小池 そう。短歌を作って月一回ここに来るということが生活のリズムのひとつになっている人が何人も出てきた。本当に嬉しいですし、責任も感じます。

ましてや歌がだんだん上手になつていくのを見ると、すごく感動してしまいます。

佐伯 なるほど。指導を受けると上手になつていくのですか、短歌は。

小池 「てにをは」を一つぐらい直して、ぱんつと歌が良くなるのが一番望ましい添削なんですけれども、そういう人ばかりとは限らなくて、全部手術しなくちゃいけないっていうものもあります。

佐伯 その人の人間性を変えちゃうみたいになると、ちょっと躊躇するっていう感じはありますよね。

小池 そう、躊躇する。だから作者の言いたいことはずらさないで、小さなところを直す。最初の頃は、これも言いたい、あれも言いたいっていういわゆる「材料詰め込みすぎ」の歌も多かった。大胆にスパツ、スパツと落としていくのが短歌の第一歩なんですけど、自分の愛着のある言葉が削られるとすごく傷つく。でも最近、省略のよく利いた良い歌がいつぱい出てくるようになりました。

予告

写真展

「星野道夫 悠久の時を旅する」

仙台文学館二〇二一年度の展示は、写真家・星野道夫の軌跡をたどる展示からスタートします。

少年の頃から北の自然に憧れ、極北の大地アラスカに生きた星野道夫。取材中の事故で亡くなり25年を経た現在においても、心打つ大自然や動物の写真と美しい文章で多くのファンを魅了しています。

本展では、20歳のときに初めて足を踏み入れたアラスカの村の記録から亡くなる直前まで撮影していたロシアのカムチャツカ半島での写真までを一望します。また、アラスカに関心をもった20歳の星野が現地の村長に宛てて書いた手紙など、貴重な展示資料をまじえ、その足跡をたどります。

「自然と人の関わり」を追い続けた星野道夫。その代表作と残された未完の作品群から、星野の新たな旅に思いをはせていただければ幸いです。



エスキモーの伝説には、多くの人格化されたホッキョクグマの語が出てくる。カナダ、ハドソン湾



アルペングロウ(山頂光)に染まる夕暮れのデナリ(マッキンレー山)。北米の最高峰で、標高6194m。手前はワンダーレイク。デナリ国立公園



【星野道夫】
1952年、千葉県生まれ。19歳のときに目にしたエスキモーの村の空撮写真に惹かれ、村長宛に手紙を書く。20歳の夏休みにアラスカに約3ヵ月滞在。帰国後、写真家になる決意をし、慶應義塾大学卒業後、動物写真家・田中光常氏の助手を2年間務める。1978年、アラスカ大学野生動物管理学部へ入学。以後、アラスカの自然と人々をテーマに写真と文章で記録し発表。1996年8月、カムチャツカ半島で取材中にヒグマに襲われて急逝。アニメ賞・木村伊兵衛写真賞受賞。

写真展「星野道夫 悠久の時を旅する」

- 会期=2021年4月17日(土)～6月27日(日)
- 休館日:月曜日(5月3日は除く)、祝日の翌日(5月4日・5日は除く)、第4木曜日
- 開館時間=9:00～17:00(展示室への入室は16:30まで)
- 観覧料=一般810円、高校生460円、小・中学生230円(各種割引あり)



ホッキョクジリスは、ほとんどアラスカ全域に生息し、多くの肉食動物の獲物になっている。

【おことわり】
新型コロナウイルス感染症の状況により、展示の予定・内容が変更になる場合があります。変更が生じた場合は、当館ホームページ、SNS等でお知らせする予定です。

【ご来館のみなさまへお願い】

- 体調がすぐれない場合はご来館をお控えください。
- 館内ではマスクの着用をお願いします。
- ご入館の際、サーマルカメラでの検温、手洗い、手指の消毒にご協力ください。
- 会場の3密(密閉・密集・密接)を避けるため、入場制限をさせていただく場合があります。